

子どもたちの体験活動へのエココイン導入によるコミュニティ拡大と子どもたちの参画に関する研究

Community expansion by the ECO-COIN introduction to children's experience activities Research about participation of children

美馬 幸子¹ 笹谷 康之²
Sachiko Mima Yasuyuki Sasatani

ABSTRACT: It is not connected with community empowerment if it does not work with mental attitude in which the side to carry out pulls out a participant's autonomy when performing experience activities regionally. And with the adult of an area supporting central activity of the person who understood the mental attitude, children's autonomy is cherished and it comes to take part in management independently. Eco-Coin is fixed to an area as structure supporting such activities, and future development is expected as one of the techniques of community empowerment.

KEYWORD; children, Eco-Coin, children center, ecology club for children , empowerment

1 はじめに

現在、2002年から開始する学校5日制や総合学習導入に向け、子どもたちの体験活動を充実させ、地域との関わりの中で子どもたちのネットワークをどう強化するかが模索されている。しかし、学校や子どもたちの活動、子どもに関わる団体はそれぞれバラバラに存在しているのが現状である。また、子どもの環境活動がアクティブな団体の多くは、こどもエコクラブに所属しており、子どもの体験機会の情報収集・提供のために子どもセンターが設けられているが、これらの団体間の交流・連携が不足している。

子どもたちが活動する上で最も重要な指標の一つが、子どもたちの参画度である。ロジャー・ハートの「子どもたちの参画のはしご」¹⁾によると、参画の段階は8段階あり、それぞれの段階を以下に示す。

- ① 操り参画
- ② お飾り参画
- ③ 形だけの参画

- ④ 子どもは仕事を割り当てられるが、情報は与えられている
- ⑤ 子どもが大人から意見を求められ、情報を与えられる
- ⑥ 大人がしかけ、子どもと一緒に決定する
- ⑦ 子どもが主体的に取りかかり子どもが指揮する
- ⑧ 子どもが主体的に取りかかり大人と一緒に決定する

ここで、④～⑧は参画の段階であるが、①～③は非参画である。ここで必要なのは、大人のファシリテータが、子どもたちのグループが参画の段階のレベルで活動できるよう支援することだ、としている。森はハートの考えを発展させ、子どもと大人が地域での学習を協働して行う、コミュニティエンパワーメントの理念と手法を示している。²⁾

一方、近年地域通貨が地域交流や地域活性化の手段として脚光を浴びてきており、多くの地域でその

¹ 立命館大学大学院理工学研究科 Graduate School of Science and Engineering, Ritsumeikan University

² 立命館大学理工学部土木工学科 Civil Engineering, Ritsumeikan University

導入が図られてきているが、成功例は少ない。筆者が事例としている草津市は、地域通貨「おうみ」を導入し、かなりの成果をあげている数少ない事例となっている。善意の活動を紙幣などに置き換え、財やサービスと交換する地域通貨に対して、特定非営利活動法人 NPO 子どもネットワークセンター天気村(以下、天気村)が開発したエココインは、子どもの体験活動への参加に対して渡されるものであり、参加する楽しみが増えるスタンプカードに似ているが、収集でき、交換が可能な点が異なる。

そこで、本研究ではエココインを用いて子どもの体験活動を促進し、子どもを取り巻く大人を含めた交流の輪が広がり、コミュニティエンパワーメントを促進するための方法を提案する。

本研究の目的は、次の4点とする。

- ①天気村を事例に、子どもの体験活動へのエココイン導入による人々の交流の拡大の実態と、その効果を明らかにする。
- ②子どもセンターとこどもエコクラブの活動実態を、子どもの参画段階から評価する。
- ③こどもエコクラブ全国大会でエココイン導入の実証実験を行い、その効果を明らかにする。
- ④上記の3つの目的の成果を踏まえ、エココインをきっかけとしたコミュニティエンパワーメントをどのように実践するか、提案する。

2 研究の方法

滋賀県草津市にある天気村は、地域社会全体の子ども及び大人に対して、様々な課題を地域全体で受けとめ、子育て支援をはじめとする野外文化体験活動、ボランティア活動などの実践活動を通して、社会の後継者を育むひとづくり、地域の文化性を生かしたまちづくり、並びに、環境保全の意識向上を推進するとともに、地域での様々な活動の情報を提供し、ネットワーク化することにより、交流の活発化を図る事業を行い、社会に寄与することを目的とした活動を展

表1: 調査の設計

調査対象	実施期間	調査方法	配布方法	回収方法	回収数/配布数	回答者	備考
あそび隊登録者	2000年11月～ 2001年2月	アンケート ヒアリング	天気村の活動内で直接配布	天気村の活動内で 電話	27/45 (回収率60%)	あそび隊登録者	登録者数 135人
滋賀県内の子どもセンター	2000年11月～ 2001年3月	アンケート	滋賀県・草津市を介し 郵送・FAX・Eメールで	郵送・FAX・Eメール	12/13 (回収率92%)	各センター担当者	センター数 13
滋賀県内のこどもエコクラブ	2000年11月～ 2001年3月	アンケート		郵送・FAX・Eメール	56/110 (回収率51%)	各クラブサポーター	クラブ数 150
こどもエコクラブ全国大会 におけるエココイン体験者	2001年3月25日	アンケート	天気村ブース内で直接配布	天気村ブース内で	53/60 (回収率97%)	エココイン体験者 (子ども)	参加者 7300

開している。天気村はくさつ子どもセンターとしても機能しており、情報誌で、エココインがもらえる体験行事の情報や、地域の情報を提供している。筆者は、この天気村で、2000年4月2日から2001年3月25日までの期間、地域の子どもたちやその親を対象にエココイン活動を行った。

子どもセンターとは、文部科学省が完全学校週5日制開始に向けて99年から実施している事業で、地域の体験機会に関する情報の収集と提供を、行政と民間が協力して行う情報連絡組織である。滋賀県内には全部で13あり、行政職員やPTA関係者、子育てグループ等からなるメンバーで協議会がつくられ、その多くは教育委員会内に設置されている。情報誌作成や相談紹介といった活動は主にボランティアによって運営されている。

こどもエコクラブは、「子どもたちの、子どもたちによる、子どもたちのための環境活動」として、子どもたちが楽しみながら環境について考え、地域の中での主体的な環境学習や実践活動をサポートする事業として環境省が95年から実施しており、全国で約75000人の小中学生が会員となっている。

表1に示すように、体験活動に参加する子どもたちに対するアンケートとヒアリング、滋賀県内の子どもセンターとこどもエコクラブに対するアンケート、2001年3月25日に草津市で開催されたこどもエコクラブ全国大会における、エココイン体験者に対するアンケートを実施した。

3 エココインの仕組みと展開

3.1 天気村の活動とエココインの仕組み

エココインは、天気村が2000年4月から実施している、遊びながらまちを探検し、まちを知る事で、みんなでもっと住みやすいまちにしていく動きをつくりだす活動“あそび隊”(あそび隊登録者は自動的にこどもエコクラブ会員となる)に登録するともらえる。エココインとあそび隊の仕組みを図1に示す。

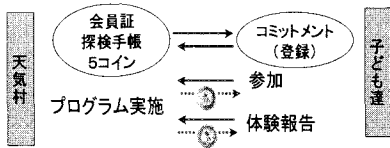


図1:エココインとあそび隊の仕組み

あそび隊に登録すると、エココイン 5 枚と会員証、体験手帳がもらえる。天気村が発行するくさつ子どもセンター情報誌やホームページで、コインがもらえる体験行事の情報を得て体験に参加すると1コインもらえ、体験報告をするとさらに1コインもらえる。コインは五百円玉大のアルミ製で、表面には滋賀県に生息する生き物などのキャラクターシールが貼ってある。全部で 12 種類あり、他の子と交換でき、12 種類集めると企業や商店協賛のエコグッズがもらえる。また、天気村の行事やイベントでの体験や遊びの参加料としても使える。また、全ての子どもが積極的に地域に繰り出せるようにと、草津駅前商店街の店主と連携し、アトムマークが貼ってあるお店に子どもたちがおつかい券を持っておつかいに行くと、お店の人からエココインを1つもらえる「鉄腕アトム大作戦:パート1 おつかい大作戦」を開始し、あそび隊に登録していない子どももエココイン活動に参加できるようになった。

天気村のエココイン活動の中で、商店街で店主から無洗米やエコ包装の話聞き、包装容器のゴミを減らすことを考える活動は、参画のはしごの⑤にあたる。草津宿場祭りの活動は、川でゴミ拾いをしたら1コイン、環境紙芝居を聞いて感想を書いたら1コイン、竹細工遊びが1コインでできる、など大人が計画し、テーマを与え、運営している活動であるが、子どもが主体的に取り組み、体験してコインを増やすか、遊びに使うか、意思決定は子ども自身がすることから、参画のはしごの⑥にあたる。里山に手作りで秘密基地をつくる活動は、子どもが主体的に取り組み、どんな基地にするか子どもどうして指揮をし合い、進めることから参画のはしごの⑦にあたる。子どもたちの企画によってフリーマーケットを出店する活動は、看板作りや店のレイアウトから運営まで、子どもたちが主体的に取り組み、大人と一緒に決定したことから、参画のはしごの⑧にあたる。

このように、天気村の活動は、ハートの参画のはしごの⑤～⑧に当たり、体験活動の内容や参加人数に

よって、うまくそれぞれのレベルを使い分けている。

3.2 エココインを用いた交流の拡大の経緯

天気村において、エココインを導入してから、現在までの展開スケジュールを表2に示す。また、エココインによる交流の拡大の様子を図2～5に示す。

表2:現在までのエココイン展開スケジュール

2000年4月	草津宿場祭りでエココイン発行
4月29日	あそび隊活動開始、72名が登録 こどもエコクラブ活動開始 毎月2回～3回の活動を企画運営 情報誌の発行
5月28日	里山プレインジャー養成講座開始 (参加者にエココインを渡す) 毎月1回の活動を企画運営
6月	滋賀県21世紀記念事業にエココインプロジェクトとして認証される
7月	くさつ子どもセンターとしての活動開始 情報誌:K2マガジン発行開始 (エココイン行事の情報掲載)
11月	草津市生涯学習課との連携により公民館活動でエココインが渡される
2001年3月	里山プレインジャー養成講座終了 あそび隊登録者数が135人となる
3月24日	こどもエコクラブ全国大会で全国にエココインをPR、約300枚が流通
3月25日	
4月	草津宿場祭りでエココイン発行 あそび隊に40名が登録
6月	草津駅前商店街との連携
7月	アトム大作戦パート1おつかい大作戦開始 (K2マガジン、HPで案内)

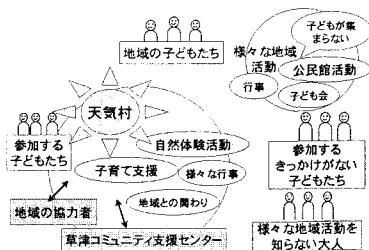


図2:エココイン導入前(～2000年4月)

エココインを導入する前は、地域の子どもたち、地域活動、子どもたちの親、天気村の活動、がそれぞれバラバラに存在しており、天気村の活動が限られた人にしか知られていなかった。

◇天気村の活動内で流通◇

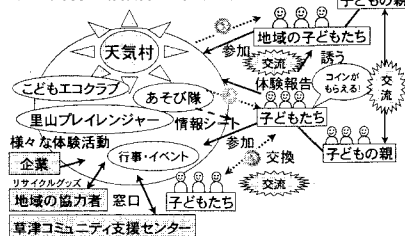


図3:エココイン実践期(2000年4月29日発行～)

そこで、天気村の活動にエココインを導入し、コインがもらえる活動を毎月2～3回継続的に実施した。すると、活動に参加する子どもどうしでコインを交換したり、友達を活動に誘ったりして交流が生まれた。さらに、子どもの親どうし、活動に参加する地域の人たちとの交流が生まれた。窓口を他の場所にも設置することで、エココイン活動を知る人が増えた。

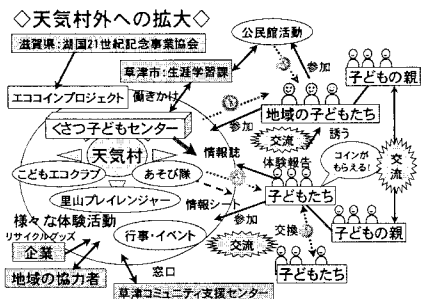


図4: エココイン運用期(～2001年3月)

その後、子どもたちが楽しみながら行事に参加し、コインを集めたり他の子と交換する事で、子どもどうし、地域の人々の交流が促進する事が期待され、「エコインプロジェクト」として滋賀県の湖国21世紀記念事業に認証された。くさつ子どもセンターとしての活動を開始し、エココインマークの載った情報誌が草津市内の小中学校等で配布され、地域での認知度が高まった。また、生涯学習課との連携により公民館活動等地域での参加の場が増えた。

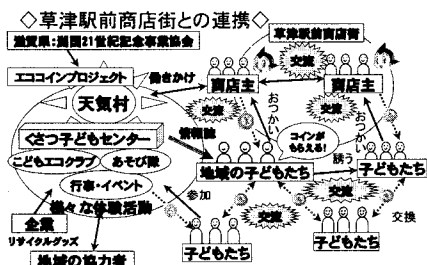


図5: エココイン運用期(～現在)

さらに、全ての子どもが積極的に地域に繰り出せるように、また、子どもだけでなく大人にもエココイン活動を支援するかたちで直接的に関わってもらえるよう、草津駅前商店街の店主と連携を始めた。あそび隊に登録していない子どももエココイン活動に参加できるようになった。店主は、子どもたちが楽しんで商店街に足を運んでくれるのなら喜んで協力する、と言

っており、現在29店舗が協力している。また、商店街の空き地を拠点として、エココインを使った定期的な催しも実施する。この試みにより、地域の子どもの交流だけでなく、子どもと店主の交流、店主どうしの交流が促進され、商店街に頻りに訪れるようになった子どもと大人が互いにエンパワーメントし合う関係ができる。

3.3 エココインの魅力

表3: あそび隊登録者に対する意識調査結果

コインを集めるのは楽しいか	楽しい	20	どちらでもない	7
コインをもっと集めたいか	集めたい	23	どちらでもない	4
天気村以外でコインがもらえたら参加しようと思うか	思う	24	思わない	3
コインのどんなところが良いか	集めるのが楽しい	25	いろいろな種類がある	2
		0%	50%	100%

表3にあそび隊登録者に対する意識調査結果を示す。これを見ると、93%の子どもがコイン集めは楽しい、と言っており、85%の子どもが活動にコインがあったほうが楽しい、天気村以外の活動でコインがもらえたら参加しようと思う、と言っている。また、59%の子どもが他の子とコインを交換した事があり、積極的に12種類集めようとしており、コインが体験活動への参加を促進させるきっかけとなっていることが分かる。子どもに対する直接的な効果として、褒賞効果(体験への参加に1コイン、体験報告に1コイン)、目標がある(12種類集めるとグッズと交換)、12種類ありコレクションできる、交換による交流、という楽しみの増大が挙げられる。5回以上参加した子どもが半数以上で、継続的に参加している。また、あそび隊登録者の親も、エココイン導入によって回を重ねる毎に天気村の活動の魅力がアップした、活動が分かりやすくなった、コインがきっかけで天気村の活動に参加するようになった、と言っている。また、間接的な効果として、子どもたちを中心とした交流の広がりが目に見えやすいものとなり、支援する大人どうしの交流が拡大し、それまで天気村について知らなかった人が活動に参加す

るようになるなど、この活動をきっかけに天気村の活動が広く地域に知れ、理解が深まった。

4 滋賀県の子どもセンターとこどもエコクラブの現状と課題

4.1 滋賀県の子どもセンターの実態

滋賀県の子どもセンターに対する実態調査結果を表4に示す。これを見ると、センターの活動方針は、

表4:子どもセンターに対する実態調査結果

質問項目	回答	件数	%
1 活動方針・目的 (複数回答)	情報提供	11	32%
	地域活動の充実	5	15%
	家庭教育支援	5	15%
	その他	13	38%
2 普段の活動 (複数回答)	情報提供 (情報誌)	11	41%
	こども関係団体紹介	7	26%
	相談機関紹介	6	22%
	その他	3	11%
3 他センターとの交流内容	県の担当者会議	5	41%
	他センター視察	3	25%
	スタッフ交流会	2	17%
	その他	2	17%

情報提供に次いで2番目に地域活動の充実、家庭教育支援となっている。普段の活動は、情報提供または相談・紹介がほとんどで、地域活動を充実させるための動きは見られない。また、センターどうしで日常的な交流や情報交換は行われていない。文部科学省が位置付ける子どもセンターの事業内容は、子どもの体験活動や家庭教育支援活動など地域情報の収集と提供、および子どもの体験活動や家庭教育会支援活動に関する相談・紹介、となっている。しかし、センターに、支援すべき対象についての経験のある人がいないと的確なサポートをすることは難しいし、センターのメンバーが自ら活動せずに地域の人が求めている情報を的確に提供するのは難しい。

以上より、滋賀県の子どもセンターの多くは、子どもの活動を支援し、交流・ネットワーク化を促すために機能していないと言える。

そこで、センターとしてのサポート体制の項目を考え、1項目につき1ポイントとして評価した。それぞれの項目を以下に示す。

- ①活動する上で市民と連携している
- ②子どもたちを巻き込んだ活動を実施している
- ③情報誌に、子どもたちを巻き込む工夫がしてある
- ④Web上でも情報を入手できる

- ⑤市民が気軽に立ち寄れる場所に設置されている
- ⑥他の子どもセンターと日常的に交流している

その結果、くさつこどもセンターが6、八日市市子育てサロンが5、みなくち子どもセンターが4、子どもセンターやすが3ポイントとなった。これら以外のセンターは0もしくは1ポイントであった。

次に、自ら子どもたちを巻き込んだ活動を行っている3センターについて、ハートの参画のはしごを参考に、子どもの参画の段階を考え評価した。

- ①大人の指揮のもとで、子どもは大人から情報を与えられ、やるべき事を指示されて活動する
- ②大人の指揮のもとで、子どもは大人から情報を与えられ、やるべき事を考えて活動する
- ③大人の指揮のもとで、子どもが主体的に情報を手に入れ、やるべき事を考えて活動する
- ④子どもの指揮のもとで、子どもが主体的に情報を手に入れ、やるべき事を考えて活動する

この中で、子どもの参画が成立するのは②～④である。子どもたちに指令を与えてまちを探検してもらう活動をしているみなくち子どもセンターと、月3～4回の定期的な遊びの行事を主催している八日市市子育てサロンは②と③に当てはまる。天気村の活動は、②～④に当てはまる。

4.2 滋賀県のこどもエコクラブの実態

表5に2000年度の滋賀県内の子どもエコクラブに対する実態調査結果を示す。

表5:こどもエコクラブに対する実態調査結果

質問項目	回答	件数	%
1 活動方針・目的	環境問題への意識の高揚	16	29%
	身近なところからの環境保全	14	25%
	自然とのふれあい	5	9%
	リーダー育成・遊びを通して学ぶ	3	5%
	無回答	11	20%
	その他	7	12%
2 普段の活動 (複数回答) (活動していないクラブを除く)	ゴミ拾い・清掃・美化活動	20	19%
	自然観察・生き物観察	16	15%
	水生生物調査・手作り・工作	13	12%
	自然調査(水質等)・新聞・ポスター作り	12	11%
	空き缶回収・施設見学・植物・食物の栽培	7	7%
	宿泊・ゴミ調査・自然体験(稲刈り等)	5	5%
	クイズ・ゲーム・呼びかけ(ゴミ分別等)	4	4%
	廃品回収・話し合い(水・ゴミ・省エネ等)	3	3%
	その他	15	14%

これを見ると、活動の方針は、環境問題への意識高揚や環境保全など、自然環境に特化したものが多く、地域の環境全体に目を向けているところ

は少ない。普段の活動については、全く活動していないクラブが 10 あり、ゴミ拾いや自然観察、生物調査、新聞作りなどが多く、地域の協力者や他のクラブと一緒に活動している例は少ない。

同様に、活動していない 10 クラブを除くクラブの活動レベルをハートの参画のはしごを参考にして考えた。それぞれの段階と、そこにあてはまることもエコクラブの数を以下に示す。

- ①大人の指揮のもとで、子どもは大人から情報を与えられ、やるべき事を指示されて活動する(43/46)
- ②大人の指揮のもとで、子どもは大人から情報を与えられ、やるべき事を考えて活動する(43/46)
- ③大人の指揮のもとで、子どもが主体的に情報を手に入れ、やるべき事を考えて活動する(3/46)
- ④子どもの指揮のもとで、子どもが主体的に情報を手に入れ、やるべき事を考えて活動する(3/46)

この中で、子どもの参画が成立するのは②～④である。これに当てはめると、ほとんどのクラブが①と②に属し、大人の主導で活動が進められており、子どもの参画が不足している。③と④に当てはまるのは、くさつあそび隊、はちまん議会ジュニア、栗東 JVR の 3 つである。はちまん議会ジュニアの活動方針は、子どもの視点に立ち子どもの意見を表明していく事であり、子ども主体で進めていく事をサポーターが理解しているため、子どもの参画が成立していると言える。栗東 JVR は、自然を通して子どもが主体的に学べる場をつくらうと活動を始めた。同じ活動をしている子どもが触れ合うのは大事だと考えて、他のクラブとの交流会は必ずプログラムに入れてあり、メンバーが地域の小学生を招待して森の中を案内するなど子ども主体で勧められている。そして、これら 3 つとも子ども自ら手を上げて会員となっている。さらに、第 1 期・第 2 期生が巣立った後サポーターとして活躍するよう心がけている。ここで共通するのは、体験活動実施側の心構えとして次のような状況をつくりだしていることである。³⁾

- ①子ども自らが関心を持つ内容について自発的に学習を進める
- ②直接的な経験を通して理解する

- ③能動的な行動を通して実施される
- ④個人差に着目して実施される
- ⑤子どもどうしが交流して実施される
- ⑥単発イベント型ではなく、継続的な活動と組み合わせる
- ⑦サポーターや地域の大人が活動に直接的に関わる
- ⑧サポーターの中に“子どもに指示するのではなく、支援をする”という共通理解がある
- ⑨到達目標を達成できたかどうかではなく、そこへいきつくまでのプロセスを重視する

4.3 子どもセンターとこどもエコクラブの課題

子どもセンターは、地域の中で子どもたちを巻き込んだ活動をしている熱心なところと、情報提供以外はしなくてもよい、と思っているところとの意識の差が激しい。こどもエコクラブについても、子どもたちに意識付けを行う上で、子どもたちの楽しみを増やし、主体性を引き出す工夫をしていないところが多い。参画の段階で上位に属する団体が先頭となって、大人たちが変わる必要がある。いずれの活動も、子どもの体験について経験を重ね、子どもたち一人一人の個を認め、教育者や指導者ではなく支援者としてのスタッフやサポーターの存在が必要である。

5 こどもエコクラブ全国大会での実験

こどもエコクラブ全国大会では、天気村のブース内とイーハトーブのブース内で体験をした子に 1 コイン、3 種類集まると企業協賛商品をあげる、という仕組みで全国からやってきた子どもたちにエココインを体験してもらった。図 6 に、エココインによる交流拡大の様子を示す。

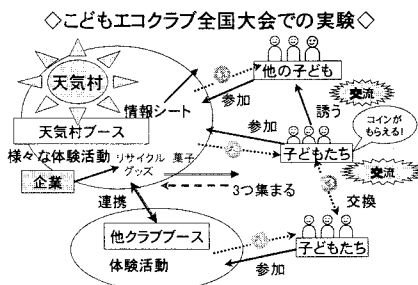


図 6:こどもエコクラブ全国大会(2001.3.25)

コインを1つ手に入れた子は、3種類集めようと続けて体験に参加した。体験しておもしろいと感じた子が他の子を誘ったり、会場で初めて会った子どもどうしでコインを交換する姿も見られ、コインによって交流が促進した。また、イーハトーブのブースと連携しそこで体験してもコインが渡せるようにした事で、天気村と子どもと、イーハトーブの活動がコインによってつながった。

表6:子どもエコクラブ全国大会における意識調査結果

質問項目	回答	件数	%
1 今日うれしかったこと	コインが3枚集まった	10	17%
	コインがもらった	8	14%
	ミミズになった	6	10%
	射撃	6	10%
	クイズ	5	9%
	いっぱい遊べた	4	7%
	その他	19	33%

表6に、コイン体験者に対する意識調査結果を示す。その日1日で最もうれしかったことは、コインが3枚集まった事が17%、と最も多かった。子どもたちに自由に記述してもらったため、回答が実に様々で、エココインが全国からやってきた子どもたちに魅力的に感じられたかどうかは明確にはならなかった。この全国大会では、子どもたちには、直接体験によってコインの楽しさを分かってもらうことができたが、エコクラブのサポーターや大人の参加者には体験的に知ってもらうことができなかった。

6 まとめ

6.1 エココインによる効果

天気村の活動でエココインを用いることで、導入する前の活動に比べ、体験への参加の証としての褒章効果、収集欲をかきたてる、交換できる、というコインの特色により、楽しみが増え、子どもたちが継続して参加するようになった。そして、子どもどうしの交流が活発になった事に加え、活動を支援する大人どうしの交流が広がり、子どもと大人の意識の共有が図られた。

6.2 子どもセンターと子どもエコクラブの活動

大多数が、子どもの主体性を伸ばし、子どもたちが自主的に運営に参画する段階に達していない。子どもが参画できる仕組みをつくりあげるには、スタッフやサポーターが4.2で示した心構えを持って、活動する

事が求められる。

6.3 子どもエコクラブ全国大会の結果

当初、大会全体へのエココイン導入を実施主体側に提案したが、受け入れられなかったため、大人がエココイン活動を支援する社会実験はできなかった。そこで、天気村とイーハトーブのブース内のみでの実験とした。参加者の子どもにはコインの楽しさを体験してもらえたものの、大人には伝えることができなかった。また、大会後のエココインに対する反応はなかったため、単発的なイベントでは結局その日限りとなってしまふ、と言える。やはり何度も積み重ねた活動の中から生まれる参加者どうしの信頼関係や、支援者としてのサポーターの存在がないと効果が発揮されない。

6.4 コミュニティエンパワーメントに向けて

地域での体験活動を実施する場合、実施主体が、4.2で示した心構えを持って活動しなければ、コミュニティエンパワーメントにはならない。そして、その心構えを理解した実施主体を中心とする活動を地域の大人が支援する事で、子どもたちの主体性が育まれ、自主的に運営に参画ようになる。エココインはこういった活動を支える仕組みとして地域に定着し、コミュニティエンパワーメントの手法の一つとして今後発展していく事が期待される。

謝辞: 今回の研究は、特定非営利活動法人 NPO 子どもネットワークセンター天気村の多大な協力に基づくものであり、この機会に改めて謝したい。

注) 加藤敏春は地域通貨に対し、お金の対象とならない“互酬”の行為を評価するものをエコマネーとしている

参考資料

- 1) ロジャー・ハート: 子どもの参画, 萌文社, P41-65, 2000
- 2) 森 良: コミュニティ・エンパワーメント, エコ・コミュニケーション・センター, P12-64, 2001
- 3) 山本 克彦: 子ども参加の援助・伴走者を育てる, 季刊子ども権利条約第10号, エイデル研究所, P41-45, 2000
- 4) エコマネーネットワーク事務局:
<http://www.ecomoney.net/ecoHP/top.html>